様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７６５

研究課題名（和文）アイヌ漆器に関する歴史的研究ー文献史学と考古学、民俗学・文化人類学の連携

研究課題名（英文）A Historical Study on AINU Shikki:Cooperation between Document-based Historical Research,and Archaeology and Folklore-Cultural Anthropology

研究代表者
浅倉　有子（ASAKURA, YUKO）

上越教育大学・学校教育研究科（研究院）・教授

研究者番号：７０１６７８８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　文献史料に記載されている漆器と、博物館等の現有資料のすり合わせを行ったことを第一の成果としてあげることができる。文献史料のほとんどは場所請負商人関係史料であり、それらがアイヌ漆器の分析に極めて有効であることを確認した。また、北海道内の博物館等の収蔵アイヌ漆器の調査がほぼ終了し、計測値と画像データが集積された。さらに、アイヌの精神文化を象徴するものと従来理解されていた奉酒箸（イクパスイ）が、和人社会の規格化された製品である可能性を指摘した。これは、従来のアイヌ文化理解に極めて重大な変更を迫る知見である。最大の成果は、文献史学、考古学、民俗学・文化人類学の研究者が、協働と融合を図った点である。

研究成果の概要（英文）：　First of all, the document-based historical research revealed that most information of literature was on that of basho ukeoi shonin,,and that the information was quite effective in analyzing AINU Shikki. Moreover, the investigations of AINU Shikki stored in all the museums in Hokkaido have been finished, obtaining all their measured values and photograph data. In addition, the study showed that Ikubasui, namely a tool used by Ainu people at festivals in order to mediate between God and Ainu people, which was thought to symbolize the spiritual culture of AINU, may be the product standardized according to Japanese society. This finding will be extremely important to change and deepen understanding of Ainu culture. The most distinguished outcome of this study is that researchers from document-based historical research, archaeology, folklore・cultural anthropology cooperated with each other and tried to combine the results from each area.

研究分野：日本近世史

キーワード：アイヌ漆器　松前藩　場所請負商人

１．　研究開始当初の背景

近世後期において、蝦夷地には、椀(杯)、杯台、行器、耳盥、片口など多種多様な漆器が、大量に将来された。たとえば、18 世紀末、幕府はアイヌとの交易用として、「夷椀」900、「三ツ椀」15 人前、酒桶 15 組、「カモカモ」(筒状の酒器の一種) 30 などの漆器を持ち込んだ。

近世において漆器は、アイヌ民族の儀式で使用される重要な祭具であり、またアイヌの家で行器などが飾られる宝壇(イヨイキリ)は、その家の豊かさの象徴でもあった。アイヌ文化の始まりを漆器の利用開始に求める見解もある。しかし、漆器が「伝統的なアイヌ文化」の重要な要素という通史的な理解はなされているものの、どのような時期に、どのような経緯を経て、どのような内実の文化が形成・営まれ、それが時期を追ってどのように変容していくのか、あるいは地域によってどのような差があるのか、また漆器文化がいつ、どのように「終焉」を迎えるのかといった具体相に関する研究は、個々の研究者によってようやく緒に就いたばかりである。

他方、和人の側から見れば、蝦夷地は漆器の一大消費地であり、また顔料として用いる朱の密輸が幕藩制的な流通体系を混乱させるものとして、19 世紀には深刻な政治問題になっていた。したがって、アイヌにおける漆器文化を検討することは、同じ列島上に歴史を歩んできた民族の歴史と文化を明らかにするのみではなく、漆器の生産・流通に関与した和人の歴史と文化について検証することでもある。

本研究の申請者は、これまで主に文献史学の立場から近世におけるアイヌ漆器の生産と流通、及び使用のされ方について検討を重ねてきた。他方、アイヌ墓の副葬品として漆器が出土すること、分析にあたって計測や実測図の作成を必要とすることから、漆器研究は、従来主に考古学研究者によって担われてきた。さらに、民具とそれをめぐる文化という視点から、民俗学・文化人類学の研究者による研究も蓄積されている。したがって、漆器研究は、歴史学、考古学、民俗学・文化人類学など、複数の分野の研究者の連携と協力によって進めることが不可欠である。

上記のような現状に鑑みて、科学研究費による共同研究を立案した。

２．　研究の目的

本研究は、文献史学を中心に、考古学、民俗学・文化人類学を専門とする研究者の共同研究によって、アイヌ文化の主要な構成要素の一つである漆器について、文献史料の分析や漆器の属性、データの定式化などによって歴史的に解明し、アイヌの文化と歴史に対する新たな論点を提示することを目的とする。あわせて幕藩制的な生産・流通、和人側の漆器文化などをとらえ直すことを目的とする。

本研究で明らかにしようとすることは、以下の4点にまとめることができる。

① 漆器の生産地を解明するために、漆器生産地において文献史料調査と伝来の漆器資料の調査を実施し、生産の状況、技法、流通、価値、製作者や発注者の意図の解明を図ること。あわせて、文献史料の解読を進め、文献史学以外の研究者にも提供すること。

②北海道の博物館現有の漆器を調査し、計測値、色、文様等の属性をデジタル画像ともに集積し定式化することによって、新たな資料像を見出すこと。あわせて、出土漆器のデータを集積すること。

③近世・近代におけるアイヌ民族と漆器の関わりについて、明らかにすること。とくに入手方法、購入価格に関するデータを蓄積す

るとともに、利用のされ方を検討し、精神文化の側面から考察すること。

④ 道内の博物館のコレクションについて、収集年代、収集者、収集年代の基本的な情報を可能な限り収集し、コレクション・ヒストリーの構築を図ること。

３．　研究の方法

本研究は、文献史料調査班、考古学・民族(民俗)資料調査班の２班の共同・融合によって遂行される。この両者は、それぞれを主担当とする研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者によって第一義的には遂行されるが、合同調査の実施と研究会の開催により、相互に連携をとりながら行った。各班それぞれの調査と合同調査を実施し、主要な文献史料の翻刻と分析、博物館現有資料の定式化と画像データの蓄積と分析が行なわれ、その上で全体を総合していくという手順をとった。

さらに、毎年度末に研究会を開催して、相互の成果を共有し、最終年度にはシンポジウムを開催した。

(1) 研究体制

本研究の研究体制は、おおよそ下記による。

浅倉と研究分担者の谷本晃久・連携研究者の東俊佑による文献史料調査班と、研究分担者の佐々木利和、連携研究者の出利葉浩司・舟山直治・小林幸雄、及び研究協力者の古原敏弘・藪中剛司・小野哲也・清水香によって構成される考古学･民族(民俗)調査班の２班に分かれての調査（一部合同調査）を行い、その後調査結果を分析・考察し、さらに年度末の研究会で成果を報告するというものであった。

⑵　研究の進展

初年度には、輪島市、加賀市、珠洲市等で文献史料と博物館現有資料の調査を、文献史料調査班と考古学･民族(民俗)資料調査班が合同で行った。さらに、新潟市や金沢市、富山市、札幌市等でも調査を行った。その上で平成26年３月に北海道大学において、第１回研究集会「アイヌ社会と漆器」を開催し、浅倉の他に、佐々木・谷本・小林・藪中・清水・出利葉・舟山・東が研究成果を報告し、その共有を図った。併せて、出席された保存科学の専門家や漆芸作家と、情報・意見の交換を行った。

26年度には、連携研究者の出利葉・舟山・東の３名が滋賀県で日野漆器の調査を行ったのをはじめ、高台寺漆器の調査等が行われた。合同調査としては、会津若松の調査を行い、博物館現有資料の調査と漆器職人等への聞き取り調査を行った。さらに苫小牧市立美術博物館においても所蔵漆器の調査を行った。年度末の第２回研究集会「アイヌ社会と漆器」では、浅倉の他に、谷本・舟山・小林・小野・清水・古原が報告を行った。これらの報告では、文献史料の記述を現有資料で確認するといった、本来の分野を超えた学術交流の成果が認められた。さらに前年に引き続き出席された保存科学の専門家や漆芸作家と、情報・意見の交換を行った。

27年度には、本科研の最終年度の総まとめとして、これまで協力を得ていた分析化学の研究者や漆芸作家の協力を得て、10月に北海道大学においてシンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」を開催した。

４．　研究成果

３年間の共同研究を通じて、まず成果として掲げられるのは、文献史料と博物館等の現有資料とのすり合わせが図られた点である。文献史料の多くは、場所請負商人関係史料である。それによって、文書中の「夷椀」が現有

資料でおよそ特定され、「台盃」の文様の種類なども現有資料と文書史料で一致が確認された。また漆器の価格についての史料の蓄積が進み、輸送方法についても、新たな知見を得るなど、総じて成果が得られた。

第二に、研究協力者の古原・藪中・小野・清水が刊行した膨大な調査報告書があげられる。これは、道内外の博物館所蔵のアイヌ漆器について計測値、色彩、文様、加飾等の基礎的なデータを網羅したもので、この成果によって、道内博物館所蔵のアイヌ漆器については、おおよそ把握することが可能となった。

しかし、それらの成果をもっても、現有アイヌ漆器の年代比定と製作地の特定は困難であった。文献史料調査においても同様であり、未だ悉皆調査を行えてはいないものの、研究を通してその困難さを痛感した。製作地に古作や文献史料が残っていることが少なく、また近世の生産地が現在においても漆器生産地であるとは 限らないためである。

大きな成果の一つとして2015年10月のシンポジウムがあげられる。このシンポジウムにおいては、漆芸作家で人間国宝である室瀬和美氏より、「北海道から発信する漆—今につながる漆文化—」というテーマで、北海道を視点に据えた漆器文化が紹介された。また研究報告として、藪中からは、特定の文様がある奉酒箸(イクパスイ)が同一の規格であることが報告された。これは、従来アイヌにより製作されたと考えられてきた祭器が、和人社会で生産されていたことを示すもので、アイヌの精神文化にも関わる、極めて興味深い報告であった。さらに、文献史学の東は、サハリン(樺太)の大福帳を分析し、北海道内と比較して、アイヌに手厚い手当が行われていたことを明らかにした。

当初掲げた四つの課題のうち、②道内の博物館現有漆器の調査とデータの集積は、８割方行うことができた。また③アイヌがどのようにして漆器を入手したのかの解明が６割程度進んだものの、①漆器の生産地における伝来漆器の調査と文献史料調査は、未だ５割程度にとどまっている。④コレクションヒストリーの提示は、地元の人からの寄贈と古物商からの購入という両方法で、各博物館のコレクションが構成されていることが確認できた。地元の人からの寄贈は、その土地に伝来した漆器資料として研究の遂行には有効であった。しかし、後者については、日高(二風谷アイヌ文化博物館等が存在)で古物商が入手したという「伝説」が多いことを確認したのにとどまる。④の課題の解明はいまだ不十分で、おおよそ２割程度である。

あわせて本科研の遂行によって、本来の領域を超えた学問の協働と融合が顕著に見られたことを、大きな成果として掲げることができる。考古学と文献史学、民俗学・文化人類学の三者の協働と融合であり、当初目指していた成果をおおよそ獲得しえたと判断する。

５．主な発表論文等

① 雑誌論文（計 11 件）

1. 浅倉有子,場所請負と漆器,北海道・東北史研究,11,2016.6.刊行予定(査読有)

2. 谷本晃久,近世の蝦夷,藤井譲治ほか編,岩波講座日本歴史,vol. 13 近世 4, 69-102,岩波書店,2015. 3.(査読有)

3.谷本晃久,蝦夷地・北海道に暮らした人びとの信仰と宗教,林淳他編,シリーズ日本人と宗教 近世から近代へ6 他者と境界,175-203,春秋社,2015.7.

4.清水香,アイヌ文化期における漆塗椀の基礎的研究,物質文化,95,103-134,2015.3. (査読有)

5．.舟山直治,函館で調達されたカモカモという漆器の制作技術について,北方地域の人と環境の関係史,143-148,2015.(査読無)

6. 清水香,擦文・アイヌ文化期の出土木製品における移入品について,北海道考古学,51,57-76, 2015. 3.(査読有)

7. 清水香,擦文・アイヌ文化の木製品,季刊考古学,133 ,45-49, 2015.(査読有)

8.出利葉浩司,スター,バチェラー,そしてアイヌの人びとをめぐる北海道でのできごと,北海道開拓記念館研究紀要,42,66-80,2014.(査読無)

9. 谷本晃久,ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所サハリンアイヌ交易帳簿の研究概報:一九世紀初頭アニワ湾岸地域における交易のすがた,東京大学史料編纂所研究紀要,24,53-62, 2014.3.(査読有)

10. 小林幸雄,アイヌ文化の漆椀の形態分類に関する基礎的検討(2)-熊図文入漆椀と津軽塗(系)漆椀に注目して-,北海道開拓記念館研究紀要, 42,23-64,2014.(査読無)

11. 谷本晃久,19世紀蝦夷地における「境域」としての可能性,歴史学研究,911,2-10,2013.10.(査読有)

② 学会発表（計32件）

1,浅倉有子,アイヌ漆器の歴史と文化,明治大学　漆の戦略的基盤形成事業講演会, 招待講演,,2016.3.1.,明治大学理工学部

2.谷本晃久,日本近世幕藩体制のなかの松前藩,D.M.ボズドネエフ博士生誕150年記念国際セミナー「日露関係史の展望:史料・コレクション・研究」招待講演,2015.11.15.,ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所

3.小林幸雄,北海道の漆製品利用に関わる歴史,日本植生史学会21015大会シンポジウム,2015.11.7.,北海道博物館

4.浅倉有子・谷本晃久,問題提起,シンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」,2015.10.11.,北海道大学

5.古原敏弘,アイヌ社会に伝わる漆器, シンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」,2015.10.11.,北海道大学

6.藪中剛司,アイヌ民具の中の漆器, シンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」,2015.10.11., 北海道大学

7.小林幸雄,椀木地の形態分類−熊図紋入漆椀を中心に-, シンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」,2015.10.11.北海道大学

8.清水香,アイヌ文化期における漆製品の概要, シンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」,2015.10.11.,北海道大学

9.東俊佑,幕末の場所経営帳簿にみる漆器, シンポジウム「漆器とアイヌの社会・文化」,2015.10.11.,北海道大学

10.舟山直治,カモカモという漆塗り容器の終末について, 研究集会「アイヌ社会と漆器II」2015.3.23.,北海道大学

11.古原敏弘,文書の中の漆器, 研究集会「アイヌ社会と漆器II」2015.3.23.,北海道大学

12.小野哲也,アイヌ民具漆器椀の形態的特徴について, 研究集会「アイヌ社会と漆器II」2015.3.23.,北海道大学

13.小林幸雄,トゥキ（杯）とイタンキ（椀）−容量に注目してー, 研究集会「アイヌ社会と漆器II」2015.3.23.,北海道大学

14.浅倉有子,輪島における漆器及び漆器関係史料について,研究集会「アイヌ社会と漆器II」2015.3.23.,北海道大学

15.佐々木利和,アイヌ絵に見る漆器,研究集会「アイヌ社会と漆器I」,2014.3.22., 北海道大学

16.浅倉有子,アイヌ漆器に関する若干の文献紹介,研究集会「アイヌ社会と漆器I」,2014.3.22., 北海道大学

17.小林幸雄,「熊図紋入椀」と「津軽塗（系）漆椀」, 研究集会「アイヌ社会と漆器I」,2014.3.22., 北海道大学

18.藪中剛司,クマの描かれた漆器, 研究集会「アイヌ社会と漆器I」,2014.3.22., 北海道大学

③　図書（計４件）

1. 古原敏弘・藪中剛司・小野哲也・清水香, アイヌ民族に伝わる漆器の調査研究-アイヌ民具としての漆器類の基礎的データの収集と分析-,全112頁,DVD附属,神奈川大学日本常民文化研究所,2014.7.

2. 谷本晃久, 近藤重蔵と近藤富蔵—寛政改革の光と影,全94頁,山川出版社,2014.5.

3. DERIHA,Koji,Rade and the Paradigm Shift in Research on Ainu Hunting Practices(Beyond Ainu Studies -Changing Academic and Public Perspectives-),全257頁, Universsity of Hawai Press,2014.

4. 佐々木利和,アイヌ史の時代へ—余瀝抄, 全422頁,北海道大学出版会,2013.6.

６．研究組織

(1)研究代表者

浅倉　有子（ ASAKURA,Yuko ）上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：70167881

(2)研究分担者

谷本　晃久（ TANIMOTO,Akihisa ）北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号： 20306525

佐々木　利和(SASAKI,Toshikazu)北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・特任教授

研究者番号： 80132702

(3)連携研究者

舟山　直治（ FUNAYAMA,Nooji ）北海道博物館,学芸部,学芸部長

研究者番号： 90181445

出利葉　浩司（ DERIHA,Koji ）北海道博物館,研究部,学芸員

研究者番号： 40142088

東　俊佑(AZUMA.Shunsuke) 北海道博物館,研究部,学芸員

研究者番号： 90181445

小林　幸雄(KOBAYASHI,Yukio)元北海道開拓記念館, 研究部,学芸員

研究者番号： 10113466

⑷　研究協力者

古原 敏弘,（ KOHARA,Toshihiro ）元北海道アイヌ民族文化研究センター,研究主幹

藪中 剛司(YABUNAKA,Takeshi)新ひだか町博物館・図書館長

小野　哲也（ ONO,Tetsuya ）標津町ポー川史跡自然公園,主査（学芸員）

清水　香（ SHIMIZU,Kaori ）東京大学,埋蔵文化財調査室,事務補佐員